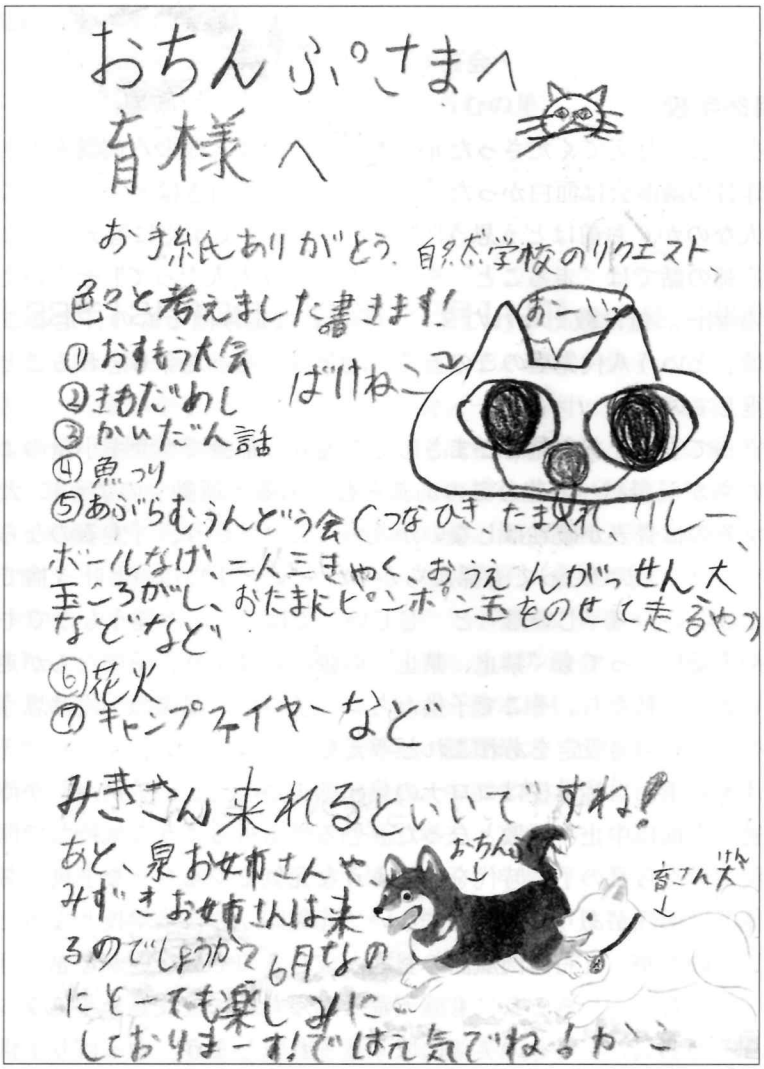
あぶらむ通信

第45号　2023年12月　　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県高山市国府町宇津江3225-1
TEL・FAX 0577-72-4219
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp


おちんぷさまへ
育様へ

お手紙ありがとう。自然学校のリクエスト、色々と考えました書きます！

①おすもう大会
②まもだめし　ばけねこ
③かいだん話
④魚つり
⑤あぶらむうんどう会（つなひき、たまいれ、リレー、ボールなげ、二人三きゃく、おうえんがっせん大玉ころがし、おたまにピンポン玉をのせて走るやつなどなど
⑥花火
⑦キャンプファイヤーなど

みきさん来れるといいですね！
あと、泉お姉さんや、みずきお姉さんは来るのでしょうか？6月なのにとーても楽しみにしております！ではぁ元気でねぇ！かこ

相変わらずの元気印
佳子ちゃん 里山自然学校への注文（小学３年生）

飛騨便り

５月に始まり10月まで続いた「夏日」、長い長ーい酷暑の年でした。皆様にはいかがお過ごしでしょうか。４年間続いたコロナもインフルエンザ並みになったとはいえ、社会構造もすっかり変わり訪れる人も激減し、いろんな面において苦境に立たされたあぶらむでした。

そんな中、一通の便りが届いた。「私たちもいつ何が起こっても不思議ではない 年齢になりました。私たちの身に何があっても私たち二人はずーっとあぶらむの会に繋がっていたいのです」と書かれて10年分の会費が送られてきた。強くつよく心支えられました。野田修助、和子夫妻、そんな夫 野田さん、視力を失った奥さんの杖がわりとなりしっかりと支えておられたのに７月に突然旅立っていかれた。

私の書いた拙い本を毎日奥さんに読み聞かせていたという野田さん、何か大切な柱を失ったようで寂しさが広がった。今年の天候不順に呼応したかのように甲藤さんはじめ大切な人が旅立っていった。年に一度のお便りというのに辛く寂しい書き出しになってしまいました。少し元気よく…。

○夏の里山自然学校

私にいろんな機会を与えてくださった元日本聖公会総裁主教の八代崇先生がある時やや興奮気味に、「昨日の講演会は面白かった。子供と大人の線引きはどこだ。どこまでが子供でどこからが大人なのか。お前はどう思う!?」禅問答のようですぐに答えられなかった私だった。「昨日の講師の話では“走ること”をやめたらもう大人だって!! そういえば子供ってよく走り回るよなァー。俺は教えられたヨ」。子供とは走り回るもの、走ることをやめたらもう大人の領域」という八代先生のこの言葉、50年以上経った今も忘れることなく私の中にしっかりと鎮座している。

この視点に立って子供たちを見るとまさにその通り。都会でウサギ小屋のような空間で生活している孫たちがジジババの住むこのあぶらむへ来ると運動会のように 大広間を走り回る。私が心配するのは畳表が破れはしないかということばかり、「走るのなら外で走ってこい!!」とカミナリ。いつまでたっても孫たちからはカミナリじじいと吐き捨てるように呼ばれ愛されることはない。（“じいじ”と“じじい”ではずいぶん違うものですね!!）

どこの公園や広場に行っても“禁止、禁止”の張り紙ばかり、子供たちが走り回れるような場を奪ってしまった私たち。そこで子供たちの“子供性”回復の手段は思う存分走り回ることと決め、そのための場設定をあれこれと考えた。

昨年夏のあぶらむ里山自然学校はコロナの集団感染が発生し、子供たちが待ちに待っていた双六川の川遊びを前に中止、解散となった。恐る恐る祈るような気持ちで開催した今夏の自然学校。静岡方面から私の子供時代を見るような元気でやんちゃな子供たちが加わってくれたため、全体的に活性がありこれまでにない“元気印”の自然学校となった。子供はそうでなくちゃと思うのだが、五右衛門風呂の釜底が破れるのではないかと思うほど高いところから飛び込む“やんちゃ”、あまりにも破天荒なやんちゃに放校処分をチラつかせる大人になった私。でもその邪気のないその笑顔に取り込まれてしまう。やっぱり子供はこうじゃなければ…!!。どっさりお疲れの今夏の自然学校でした。（でもそれ以上に元気をもらったかなァ…!?）

○はじめての芋掘りと焼き芋体験

あぶらむの里から番犬がいなくなってもう３年。いろんな人が訪ねてくる場所なのでおとなしい犬、これまで飼っていたラブラドールが良いと思ったらなんと子犬が50～70万円。軽トラックが買えちゃうよと断念。ここには番犬を買う財力がないと知ったイノシシやタヌキなど野の動物たちのやりたい放題となった。特に一時はおとなしくなっていたイノシシの被害が大きく、畑だけではなく石積み箇所など崩される状態。そこへもってきてこの夏の暑さ、元気なのは草ばかり。その上これでもかと葉ものを食べ、葉を葉脈だけのレース状にしてしまう害虫の大発生。弱り目に祟り目にその上もう一つ。葉ものを諦めて芋など地中野菜に切り替えた。サツマイモはイノシシの大好物、ネットで見つけたイノシシ撃退器を置いてみたらこれが意外と効果あり。60本植えたサツマイモは順調に育ってくれた。10月末、地元の児童養護施設で生活している子供たち20人ほどと里親会の家族総勢40人ほどで芋掘り・焼き芋大会をした。

しかし、芋は育つには育ったのだが、どれもお相撲さんのような巨大芋。焼き芋にするような手頃な大きさは少なかった。それでも落ち葉を集め、稲藁と混ぜての落ち葉焚き。２時間ほどで焼けた芋の美味しかったことといったら絶品。子供も大人も ただただ無心に食べた。昨年夏から始めた養護施設で生活する子供たちと里親会 家族との交流プログラムはこれで３つ目。回を重ねる度に子供たちの目が安心した目になっていくのが私には何よりも嬉しかった。よし！来年はサツマイモの苗100本!! どうぞ その時は焼き芋好きの皆さんもおいでください。大歓迎です。

○桂歌之助落語会 in 沖縄愛楽園

私の心を育ててくれた国立ハンセン病療養所 沖縄愛楽園にある“祈りの家教会”が創立70周年の記念年を迎えた。何かプレゼントをと言ったら返ってきたのが “歌之助さんの落語会再び”だった。2017年、「愛楽園創設者 青木恵哉師の足跡を訪ねて」のスタディーツアーを催した時、愛楽園と外部をつなぐ一つの方法として これまで交流の少なかった両者の間に“落語会”を置いた。祈りの家教会に人が溢れ、活気ある笑い声が満ちた。その時の光景が忘れられないというのが理由だった。コロナウイルス感染拡大防止のため、この４年間完全閉鎖した療養所、絶対隔離の時代に戻ったかのようだった。実際、きょうだいの臨終間際の見舞いに行って10日間の外出禁止処分を受けたり、葬儀にも参列できなかったりというご婦人がその胸の内を語ってくれた。そんな状況下、今回の落語会開催は難産だったようだ。最終的に入園者及び介護員など園関係者のみということになり、外部者は禁止となった。

現在の愛楽園は入園者数93名、平均年齢85歳。私が訪ねた50数年前の10分の１となった。

もともと手足に障害の多いこの病気、そこへもってきての高齢化、多くの人が車椅子使用だった。そのため会場はテレビ中継設備のある学校並みの公会堂、自力歩行ができる人は数名で15名ほどは車椅子。１台に一人の介助者、そして園の事務職員などで総員40名ほどの広～い会場でのこぢんまりとした落語会。沖縄と上方落語の舞台と文化の違い、高齢による聴力障害が混じり合って「今なんて言ってるの」と大きな声、それを説明する介助者の声。歌之助師匠もリズムがつかめず相当苦労していました。入園者だけの落語会は前回と異なり笑いの少ない静かな落語会でした。しかし、コロナ禍で中断していた外部からの風、やっと少

し元に戻れたと入園者自治会長の小底さんは喜んでいました。歌之助さんには苦労をかけたと思いますが、私もやってよかったと思いました。これをきっかけに外部との交流が以前のように豊かになればと願うばかりでした。

○家裁少年との20年

８月下旬、岐阜家庭裁判所より電話があった。久しぶりの少年補導委託かと思ったら最高裁判所長官賞の打診だった。この20年間、補導委託制度の中で22名の少年を預かり送り出してきたその労に報いたいということだった。人生このかた小学校の運動会、徒競走以外 賞状というものには縁のない私。神様からこのあぶらむの里というご褒美をもらっているからもう十分ですと言って丁重にお断りした。「いえ、そうおっしゃらず」と相手も粘り腰。横で「くれるというならもらっておきなさいヨ。いつどんな時に役に立つかわからないから」と側にいたＡさん。実際 このあぶらむの里の土地購入の際、所有者の国府町より身分証明を求められた時、長年ハンセン病啓発に携わったとして大正天皇の妃 貞明皇后記念財団からもらった銀製の朱肉入れがものをいった。これから若者育てのためもう一働きしようと思っている私、行政相手に色々やり取りがあると思う。これまでもあった。「何かの時に、何かに役立つかもしれない」と思い、あっさりと前言を翻して受けることにした。しかし私の注文は一つ、大郷個人としてではなく“あぶらむの会”としてと。相手は分かりましたと言ったが、賞状は個人名になっていた。あぶらむに集う多くの方々が家裁少年を育てていただいたと思っているので私の気持ちは変わりません。でも何か首に鈴をつけられたようで…。もう少し暴れまわりたいもうすぐ78歳のまだやんちゃ盛りの私です。

そんなあれやこれやの中、異常気象と思われる今年も終わろうとしています。ウクライナやパレスチナなど世界中が戦争の危機の中にあるというのに自分の身の回りのことしか書けませんでした。このような時だからこそ「マラナ・タ（我らの平和の主よ、来たりませ）」と強く祈りたく思います。

どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎えください。

2023年12月　あぶらむの会　代表　大　郷　　博

広々とした公会堂で行われた落語会。会場の広さとそこに集まった入園者。療養所の推移が象徴されているように思った。歌之助さん、ご苦労様でした。

あぶらむっ子の活躍

「何があっても戦争はならんどう!!」曽祖母から伝えられた沖縄戦で「児童・生徒の平和メッセージ・作文部門」令和２年度 中学校の部で最優秀賞を受賞したあぶらむっ子の一人、金城陽詩さん。（2021年あぶらむ通信 第43号）

令和４年度 高等学校の部でも最優秀賞を受賞しました。

看護婦としてひめゆり部隊に従軍した生き残りとしての語り部からバトンを引き継いだ新たな平和メッセンジャーの想いをお伝えします。

第32回「児童・生徒の平和メッセージ」作文部門　高等学校の部　最優秀賞

想

沖縄県立開邦高等学校二年　金城 陽詩

2020年７月、中学３年生だった私の元に一通の封筒が届いた。差出人は、心当たりのない女性だった。「拝啓、突然お手紙差し上げます。６月29日の琉球新報『声』の欄を拝読致しました」。私が平和学習を受けて書いた感想がたまたま新聞に載り、それをお読みになった方がわざわざ私にお手紙を送って下さったのだ。それが玉木さんとのやり取りの始まりだった。封筒の中には、お手紙と一緒に一冊の青い冊子が入っていた。表紙には、「少女十歳の戦争体験－戦禍の中で－」そう書かれていた。

40ページほどの冊子の中には、玉木さんが経験した沖縄戦の「すべて」が書かれていた。上空を飛び続ける戦闘機としきりに降ってくる爆弾の音や色。破壊され続ける街の見たこともないような景色。医師であった父との最後の時間。一人、また一人と、同居家族九人全員と死に別れてしまう過程。77年前のあの夏の全てが事細かに記されていた。

「農道といい、畑や原野至る所に死体、死体、死体である。死体は様々だ。

真黒に腐敗し膨れ上がった死体、真夏の灼熱の太陽の下で直に腐敗し死臭を放つ。死体は転がっているというより折り重なっている状況である」。

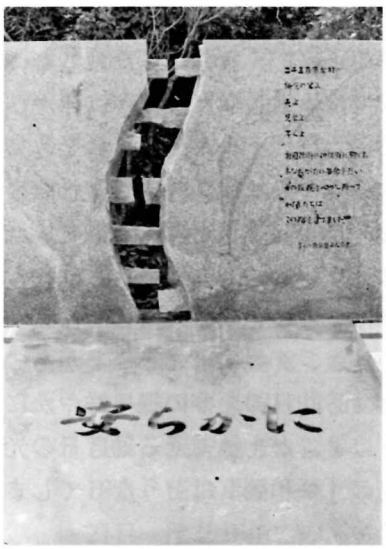
私は小説を読んでいるのかとさえ思った。けれども、文章中に出てくる見知った地名と、今までの平和学習で目にしてきた当時の写真のおかげで、映像ははっきりと頭の中に浮かび上がってくる。これがたった10歳、本来なら休み時間に外でドッジボールや鬼ごっこをして騒いだり、唐突に無茶なことをして親や先生に怒られたりするはずの10歳が巻き込まれた出来事なのか。そう考えると言葉が出てこなかった。もちろん今までの平和学習でも似たような表現の文章は何度か読んできた。当時の景色も何となく知っているつもりでいた。けれど、15歳になり10歳という年齢を幼く感じるようになった時、私はやっとその事の重大さに気が付いた。玉木さんは私への手紙にこう書いていた。「自分の15歳、20歳にどんなことがあったか全く思い出せないのですが、あの10歳の夏の戦場は何時でも昨日の悪夢の様に鮮やかに思い出されるのです」。77年経ってもなお昨日のことのようによみがえってくる幼き日の光景。それが私たちが知らないまま消え去っていくと、この島の「平和観」はどうなってしまうのだろう。

私には14歳で沖縄戦に巻き込まれた曽祖母がいた。曽祖母は私が幼い頃から自分の戦争体験を話してくれた。けれど、私が知っているのは「誰々が爆弾に当たって亡くなった」「どこどこまで長い距離を歩いた」というような話ばかりで、当時の細かい状況を聞いたことはなかった。私は幼かった故に自分が聞くのが怖くて、そして幼いながらに曽祖母を傷つけてしまいそうで、あの時の様子を鮮明に描写してほしいとはお願いできなかった。もっと詳しい話はもう少し大きくなってから聞けばいいと、そんな風に思っていた。しかし、曽祖母は私が当時のことをもっと詳しく聞く前に、逝ってしまった。今の私には、私が想いを感じ取っていた曽祖母のあの目を、あの表情をそのまま誰かに伝えることはでさない。他の人が聞けばさっと「へぇー、そうだったんだ」、その程度で終わってしまいそうなことしか話すことができない。何もできないまま、家族としても、戦争体験者としても、大切な人を失ってしまったと、そう後悔した。だからより一層、私が曽祖母に聞くことのできなかった事が細かく描写されたこの一冊が、大切になった。

私は毎年学校で行う平和学習を前にして、自分自身を無力な人間だと感じる。毎年似たような内容を学ぶ平和学習の後には、たいてい皆「戦争はしてはいけないと改めて思いました」、「自分たちには想像できないほどのむごさで、当時の人たちはすごいなと思いました」、といった当たり障りのない感想を書いて終わり。私は心の中で「こんなやり方で、あの時のことを自分からもっと知ろうとする人は何人いるんだろう。私たちが真剣にならなかったら、ばあちゃんたちの苦しい記憶はこれからどうなっていくの？」とは思いつつ、結局誰にも何も言えず何も行動できない。ただの平和な世しか知らない、平和ボケした無力な人間。私にできることは何なのか、という問いの答えは何年も見つからなかった。

しかし、手紙の中で玉木さんは「私達実体験者にはもう時間が有りません。でも、貴方が居る、受け継ぐ使命感に溢れる貴方が居る、有難う貴方の成長を楽しみにしております。」という言葉を下さった。そして、私たちが学んできたあの時の事と平和の大切さを後世にも伝え続けてほしい、と。

私たちがでさることは、この記憶と想いをいつまでも絶やさないこと。そっくりそのまま伝えられなくてどうしよう、なんて迷うのは時間の無駄だと気づかされた。私たちには若さがある。行動できる力がある。受け継いだ記憶と想いを後世へ残せるかは私たちの行動次第だ。玉木さんはきっと、この冊子とともに私に想いを託してくれたのだろう。だから、私に託された未来は、私が必ず護る。大切なこの一冊と曽祖母の記憶を胸に抱えて。



50余年前に訪れた時の「平和の礎」。
戦、本土と分離された沖縄の姿を表現したかのようなその石碑、
どこを探してもなく、公園は美しく整備されていた。

あぶらむの里との出会いから

飛騨地方養護施設職員　直井　俊

初めて大郷先生と育さんにお会いしたのは私が小学校を卒業したばかり12歳の春でした。両親と一緒にあぶらむの里を訪れ、お二人が引率してくださるネパールの旅に参加しました。人生初の海外が12歳の私には聞き馴染みのない「ネパール」。飛騨から関西空港まで行くのに４時間半、バンコクを経由してのフライト。衝撃はネパールに着いてすぐに訪れました。

空港から首都カトマンズの街中へと向かうバスに乗ると、窓の外から10人以上の子どもたちが私たちのバスを囲い、車内に座る私たちに腕を伸ばし、手のひらを上に向けて求め訴える…その光景に私はどうすれば良いかも分からず、呆然と見ることしかできませんでした。その姿に圧倒され、ジワジワと身にまとう言葉にできない感情で包まれ、そのバスが１秒でも早く出発するのを懇願していたのを今でも鮮明に覚えています。他にも語り尽くせないほどの思いを体感したネパールでの経験は私の人生の礎となっています。

あれから25年経った今、私は飛騨の児童養護施設で働いています。今年の４月からは施設と里親さんを繋ぐ「里親支援専門相談員」に就いた事が縁となり大郷先生、育さんに再会しました。四半世紀ぶりの再会にも当時と何ら変わらない温かな笑顔で迎えてくださいました。

虐待を受けた子どもや、家族の何らかの事情により家庭で生活が難しい、社会的養護が必要な子ども達は全国でおよそ４万５千人いるとされています。これまでは施設に入所し、大きな集団での共同生活が主流でしたが、国の方針変更もあり、現在は定員を減らした施設の小規模化や里親さんに依頼をし、より家庭に近い環境での養育へと転向するようになりました。そんな世の移り変わりと同時期に里親として登録をして頂いたのが大郷先生でした。

大郷先生には施設で生活する子ども達の週末や夏・冬休みなどを利用しこれまで何人もの子ども達の受け入れをお願いしてきました。10歳からあぶらむの里にお世話になっているある子どもが今では18歳になり、私にこんな話をしてくれました。

「大郷さんは学校の先生や他の大人と違いちゃんと俺の話を聞いてくれる。誰にでも言っている同じ言葉ではなく俺に向けて言葉を言ってくれる。だから信頼できる。それにあぶらむの里で会う人達はみんないろんな経験をしていて話していても楽しいんだ」

私自身も彼に対しどこかで彼の言うような“用意していた言葉”を並べていたのかもしれない、とハッとされられました。そしてこれも彼の言葉通り、あぶらむの里は様々な経験をされた人生の旅人が多く集まる場でもあり、その一つ一つの出会いも彼がこれからの将来を描く中で可能性の幅を広げ、人生を豊かにする財産になっていくのだとも感じました。

昨年からは飛騨地方の里親会と施設の子ども達との交流会があぶらむの里で始まり、今年からはその活動も本格化してきました。夏のデイキャンプ、育さん指導のもと、本格ピザ窯で焼きたてピザをみんなで腹一杯楽しみ、大自然の中でのジップラインと川遊びは子ども達の「もう１回」の無限お願いループ。最後は五右衛門風呂で芯まで温まった子ども達は体も心もホッカホカで帰りの車内では全員が深い眠りに落ちるのでした。秋の芋掘り会では自分たちで掘り出した芋での焼き芋、お昼には新米のおにぎりと豚汁。まさに秋の実りを十分に

楽しむ食欲の秋となりました。

普段はテレビにかじりつき、ゲームや動画の取り合いばかりの子ども達があぶらむの里では五感を研ぎ澄まし、全身全霊で身体を使い目一杯楽しむ、またそんな姿は子ども達のみにあらず交流会に参加された里親さんやご家族の皆さん、施設職員も一緒で、活動を通じ施設の子ども達との距離がグッと近づいていくのも感じられました。

この春の再会からわずか８ヶ月間ほどの期間ですが、あぶらむの里がこの飛騨の地の子ども達や里親さんに与える影響や役割の大きさを感じ、私はただ頭が下がる思いでいっぱいです。また同時に私自身、再びこうしてあぶらむの里に訪れ、お二人にお会いできたご縁への感謝を心の底からひしひしと感じています。
あの時、ネパールの子ども達を前にただ呆然と立ち尽くしていた私でしたが、現在、私の周りにいる子ども達に私自身何ができるのか、その多くは今もこうしてあぶらむの里から学ばせて頂いております。

卒業生達、それぞれの還暦祝い

この土地に来て40年近く、立教時代学生だった卒業生たちも“還暦”を迎えるようになった。沖縄のハンセン病療養所や太平洋戦争フィリピンルソン島決戦の戦場になった山岳州の村々での交流プログラムなど、中身の濃い学生生活を共にした卒業生たちと“アラ還”の会をもった。ならば“アラ喜寿”金婚式祝いも一緒にと20名も集まってくれた。40年余のつながり、私たちにとって大きな喜び、財産だった。

それぞれどんな人生を歩んだのだろうか、この通信への原稿依頼をした。

還暦が近づいて

酒井 英代（旧姓 奈良）

昨年義母と母が他界した。90才と86才だった。

長年気にかけていた存在がなくなって、其々にこの世の役目を果たして逝った、心の中に生きていると思う一方で、亡くなったことを受け止めきれない自分がいる。

母は思いやりのある人だったが、自分にも人にも厳しい人だった。父親を早くに亡くし、母親は長患いの末、思春期に亡くなり、４人姉兄妹弟の３番目の生まれは、母に甘えを許さなかったのだろう、死して人からしっかりした人だったと聞くと、娘としては複雑な思いがする。

父も同じような境遇の育ちだった。母子家庭の末子で、貧しくて進学を断念せざるを得ず、小学校卒だった父は労働運動に傾倒した時期もあり、子どもに教育をという思いが強く、私は幼少期から男に負けるなと言われて育った。

教育熱心で社会への関心の高い家庭に育てば、関心は自ずと定まり、私は社会学を選考した。当時社会学部のある大学は少なく、立教はその一つだった。受験勉強から解放された私は、24時間を自分が好きなことに費やせるのが嬉しくて、手当たり次第に興味のあることに手を出した。振り返れば、エネルギーだけはある、視野の狭い若者だったと思う。

好きなことばかりに気をとられていた私は、卒業が近づいて社会に出る準備が出来ていないことに慌て、亡き坂口順二先生の口利きで、月７万の手当が支給される“勤労青少年指導者大学講座”に進んだ。卒講後は社会教育系の資格や経験がなかった為、大学の求人票にあった社会学部卒で唯一既卒可だった都市再開発の会社に面接に行き、採用された。

入社したタカハ都市科学研究所では、行政の地区整備計画等の方針の検討とその報告書を作成する部署に配属になり、給料を貰って良いのかと思う位、学ぶのが仕事だった。一年半の在籍中３つのプロジェクトで報告書の作成に関わったが、職場内結婚で退職。
一生仕事をする気でいた私は、自分でも思いがけない退職・結婚・出産という一連の重大事に翻弄され、自分で自分が誰なのか、分からなくなり、生き急いでいた。

夫の実家は何百年と続く地方の旧家で、平成になっても家（家制度）が生きている！と思い、心底驚いた。育った家庭と嫁いだ家庭の違い、夫との価値観の違い、母妻嫁と職業人の幾つもの役割。頭でっかちのまま走り続けて13年目に倒れ、仕事に行けなくなった。
そんな私を支えてくれたのは煮詰まった私の話を聞いてくれる母と義母だった。義母は大きな人で、私が任意団体で配食サービスの事務をしたり、社会福祉法人へ再就職した後も、陰日向なく応援してくれた。

私の体調が上向いた後、義母が胆嚢炎で入院し、それが因で認知症を発症、立場が逆転した。
義母とは本当に相性が良かったと思う。嫌な事を言われた事は一度もなく、親身になれる関係だった。義母の認知症が進み、おしゃれで気風の良い義母はもういなくなったのだと思った時、涙が出た。この時私は本当の意味で精神的に大人になったように思う。

２年程してリーマンショックの煽りを受けて、義父の創設した会社が倒産しかけ、義父と夫は引責で、莫大な借金を背負って会社を去った。資金繰りに焦る余り、義父はネット詐欺に遭い、蓄えを失った。前後して息子が、年収の２倍近い借金を友達絡みで背負う事になり、人生は山あり谷ありというのは本当だと思った。

生きている間には色々あるが、私がそれらを乗り越えてきた根底には、乗り換えられない

試練は来ないという言葉と、沖縄キャンプ（ハンセン病療養所 愛楽園）での体験があったと思っている。

還暦が近づき、気力が低下しつつある自分を、若い頃の自分が見たら何と思うだろうと時々思う。保守的になっていると嘆かれるような気がするが、私は今の自分でいいと思っている。役割から離れ、これからどう生きるか、これが目下の課題だと思うが。

2023年クリスマスに思う

鈴木 康仁

歳を重ねました。今年（2023年）63歳ですよ。そして、卒業40周年を迎えました。

来年（2024年）には、これまでのサラリーマン人生に終止符を打ち、NPOなんぞ作って障害のある人たちや発達支援の必要な子どもたちの相談支援に従事しようなんて考えています。

この歳になって無謀ともいえる新規事業に思いが至ったのは、立教時代の４年間とその後のあぶらむでのつながりや新たな出会い、そして、いまに至るまで末永く、粘り強くおつきあいいただいたみなさんのチャレンジし続ける姿。ホントですよ、ホントにそう思っています。

1983年卒業と同時に親族が経営する繊維製造会社に勤務。こたつ布団を作って売っていました。でも11年もしたら飽きたというか、イヤになってしまって・・・何の宛てもなく離職し、無職に。ハローワークで求人票をめくりめくりめくり見つけたのが、知的障害児施設を運営する社会福祉法人。障害のある若者の就労支援に従事しました。このときもぼくの背中を押してくれたのはみなさんの存在。みなさんの濃厚な人との関わり、そしてそれに喜怒哀楽する様子をうかがい、若干の嫉妬もあって、全くの未知の世界に踏み出すことができました。

今の関心事は、お酒の量を加減しつつ、健康でいること（できるかなあ）。そして、2024年４月からさらに自由になったぼくをご覧に入れられるように（できるかなあ）精進したいと思います。

『第11期通常総会　開催報告』

第11期通常総会を2023年３月にあぶらむの里で開催いたしました。多くの方にご参加いただき、心よりお礼を申し上げます。

日　　時：2023年３月18日（土）16：00～17：45
場　　所：あぶらむの里　母屋
出 席 者：正会員24名（あぶらむの里8名、リモート参加16名）
総会次第：
（1）開会挨拶
（2）議長・書記・議事録記名押印人の指名
（3）定数の確認
（4）議案
・役員の選任（第12期は役員任期２年の２年目です）
役員全員再任で可決となりました　＊敬称略
理事：大郷博（代表理事）、山田益男、西田邦昭、杉木峯夫、柴原薫、大郷育、川上美砂、西村正和
監事：川上詩朗
・第11期活動報告
・第11期決算報告及び監査報告
＜貸借対照表＞
資産合計 95,525,642円（流動資産51,129,974円　固定資産44,395,668円）
負債合計　296,983円（短期借入金296,983円）
正味財産 95,228,659円（うち当期正味財産減少額1,298,980円）
＜収支内訳＞
収入合計 9,509,762円（会費収入1,612,110円　寄付収入2,560,018円　研修収入3,287,590円　他）
支出合計 10,808,742円（減価償却費を除いた実質支出7,873,817円）
当期収支△1,298,980円（減価償却費を除いた実質収支1,635,945円）
・第12期活動計画
・第12期予算（案）
＜収支予算案＞
収入合計 7,680,000円（会費収入1,500,000円　寄付収入2,700,000円　研修収入2,300,000円　他）
支出合計 10,680,000円（減価償却費を除いた実質支出7,680,000円）

当日の資料、議事録は、あぶらむの会ホームページに掲載しています。
http://www.abram-no-kai.com/
画面右メニュー　"会員専用ページ"（パスワード：UTE48）にログインして、画面右メニュー　"2023年総会報告"をクリックしてください。

『第12期通常総会について』

第12期通常総会をあぶらむの里で開催させていただきます。多くの方のご参加をお待ちしています。

2024年度会費納入いただいた会員各位に対して、１月下旬～２月上旬頃に正式案内状を郵送させていただきます。

日時：2024年３月16日（土）16：00～（15：30～受付開始）
場所：あぶらむの里
議案：第１号議案　第12期活動報告、決算報告、監査報告
　　第２号議案　第13期活動計画、予算案

2023年あんなこと（あぶらむこの一年）

１月・大郷、年末よりコロナに罹り絶不調の年明けとなる。
・２日　立教大学、50年ぶりに箱根駅伝に出場。(18位)
・26日　久しぶりに気温が－12℃に下がり強風。そのため重機の燃料が凍結し除雪ができずえらい思いをする。
２月・４日　飛騨地区里親会勉強会
・７日　今冬初めての屋根の雪下ろし。
・大郷、後期高齢者運転免許証更新。初めて認知症テストを受ける。(軽いショック)
・23日　猪臥山（標高1519m）雪上ウォーキング。
３月・東京にて理事会開催。
・10日　除雪用重機のタイヤチェーン外し。もうすっかり春模様。
・10日　飛騨地区里親会、本年度最後の勉強会。
・18日　第11期通常総会
４月・８日　あぶらむの里、桜開花。いつもより半月ほど早い。
・畑、田打ち開始。
５月・田畑肥料まき
・20日　田植え
・26日　大郷、立教ローバース創部99周年記念出席のため東京へ。
・７年ぶりにニホンミツバチ２群巣箱に入る。
６月・７日　コロナ明け、初めて沖縄から友人、知人を迎える。
・11日　飛騨地方、例年より早い梅雨入り。
・16日　田のボタ、モグラ被害で水漏れ発生。一人で補修作業。
・21日　陸前高田での「希望のトランペット」に出席、遠野へ移住したＦ家族を訪ねる。

・26日　ブルーベリー摘み開始。ミツバチ１群、クマかイノシシに襲われ全部きれいに食べられてしまう。

７月・あぶらむ敷地内にナラ枯れ病発生。５本切り倒し、時季外れの薪づくり作業となる。

・８日　今年度、飛騨地区里親会の勉強会開始。

・敷地や田畑の雑草の伸び、例年の倍以上。毎日のように草刈り作業。また、イノシシの被害多発。

・20日　飛騨地方、梅雨明け。

・28日　岐阜・生と死を考える会、夏期あぶらむ宿泊研修。

８月・４日　あぶらむ里山自然学校開校（4～9日）。Ｕターン台風沖縄直撃で参加できぬ子も。

・12日　児童養護施設「夕陽ヶ丘」児童・職員と飛騨地区里親会との第２回交流会。
天然鮎（あゆ）のつかみ取りで子供たち大盛り上がり。

・20日　田の水止め。

・26日　けものの被害を免れたニホンミツバチからの採蜜。家賃として８ℓいただく。

９月・２日　飛騨地区里親会勉強会

・４日　立教 PRC（フィリピンキャンプ）、コロナ明け４年ぶりのあぶらむ合宿。

・８日　イノシシ被害防止のため畑に電気柵設置作業開始。

・14日　念願のコスモス開花。いつも雑草に負け開花に至らなかった。

・23日　稲刈り。今年は22名の応援隊！

10月・６日　急に肌寒くなり薪ストーブを焚く。

・７日　持ち寄りコンサート－大人の学芸会－

・８日　第13回 桂歌之助落語会 in あぶらむの里

・13日　JA 看護専門学校あぶらむ一日研修会

・14日　稲脱穀。今年は不作、30％の減収。

・22日　児童養護施設「夕陽ヶ丘」の子供たちとの芋掘り、落ち葉での焼き芋大会。

・27日　あぶらむとして家庭裁判所補導委託事業で最高裁判所長官賞を受ける。

・28日　松茸１本 get ！だが今年は不作。

11月・11日　岐阜・生と死を考える会、定例学習会で講演。

・20日　６年ぶりの沖縄訪問。22日、桂歌之助落語会 in 愛楽園をもつ。

・25日　立教大卒業生たちの還暦を祝う会。その席で NHK-BS「街角ピアノ」を発案したディレクター尾崎竜二君と共に、沖縄愛楽園の創設者 青木恵哉師の「選ばれた島」の映像化の話が熱く語られる。

・米の減収は地力の低下⁉と思われ、落ち葉の堆肥軽トラ７杯分を田に入れる。

12月・あぶらむ通信 第45号発行

・白いものがチラホラというのに越冬準備が全く手つかずの今年。
どうぞよいクリスマスを、よいお年をお迎えください。

「人を乗せてはいけません」と書いてある除雪用重機、しかし子供たちにはこれが楽しみなのです。こんな写真を載せてはいけないのでしょうが、子供たちのあまりもの笑顔に魅せられてついつい…。

今年の稲刈りの助っ人はご覧の人数。圧巻は以前ウーファーで来た台湾の陳くん、新婚旅行を兼ねての稲刈りでした。二人の結婚生活“豊作”でありますように！

あぶらむオリンピック競技の一つ、スイカ割り。あぶらむの経済状況では本物のスイカは無理。風船で代用です。

地元養護施設で生活する子供たちとの芋掘り、焼き芋大会。土から出てきた芋が大きすぎて…。来年は焼き芋サイズに育ちますように!!

2024年　こんなこと（行事予定）

コロナが終わってもあぶらむは女房と私の二人羽織。現在確定、予定しているのは下記の通りです。その他は決定次第、あぶらむのホームページにてお伝えします。

http://www.abram-no-kai.com/

・２月10日～12日　雪遊び、沖縄からの冬季訪問団。
・２月23日～25日　あぶらむ冬の自然学校（予定）
・３月16日（土）　第12期通常総会（場所：あぶらむの里）
・５月18日　田植え（予定）
・８月２日～７日　あぶらむ里山自然学校
・９月21日～22日　稲刈り（予定）
・10月12日　持ち寄りコンサート－大人の学芸会－
・10月13日　第14回 桂歌之助落語会 in あぶらむの里
　　脱穀（予定）

寄付者（'22年12月13日～'23年12月11日）敬称略

赤嶺聡子／秋本光一郎／阿久津富男／浅香恵／新家恵子／新垣トシ子／安久真広／安保洋勝／池淵透・真理子／石原つや子／市川聖マリヤ教会／一柳典利・百／伊藤純子／伊藤浩子／井本正樹／岩佐英夫／岩田幼稚園／岩間光雄／上原成和／鵜川久・貴子／鵜川雅行／鵜野勝教／宇野喜旬子／遠藤淳治／遠藤祐規／太田亟慈／大橋久美子／沖縄聖マルコ保育園／奥洋子／小野田恵子／片桐多恵子／片山佳子／神原一二美／河合博和／川上詩朗・美砂／川口弘二・暁子／河田健二／川満すわ子／木ノ内伸子／木俣貞子／倉持章子／河野正司・マリ子／河野道太／香村美成／小堀ひろ子／小間正夫・美代／小柳證／斉藤保／坂尾千恵子／坂本澄夫・純子／坂本吉弘／笹部昭博／静谷英夫／渋谷聖ミカエル教会／下地道子／㈱すくらんぶる／鈴木暁／鈴木育三／鈴木和子／鈴木竹次・保子／鈴木康仁／須田肇／須間栄津子／園部千恵子／染谷孝章／高田建夫／高橋秀／橘政興志／舘野裕之／田中真理子／棚橋忍・美江／棚原恵正／谷章子／谷利子／俵里英子／丹安紀子／中部学院大学／坪井令夫／露木充／寺田信一／東京セントポールライオンズクラブ／遠山章夫／富山マリア教会／豊永泰子／直井雅子　／永井深雪／中島務／中島陽子／長縄年延・光子／中村力・英子／中村正明／中村芳枝／新倉俊吾・久乃／ネギの金子さん／野崎久子／長谷川秀司／長谷川牧子／畑井正春／羽根英子／林賢之輔／速水直子／原川節子／光安啓明／比屋根るりこ／藤井和彦／藤井誠・ひろ子／藤田町子／藤本隆／古川斉／古沢伸雄／北條鎮雄／星野一朗／前田晃伸／松戸聖パウロ教会／三沢悠子／宮城正男・正子／宮古聖ヤコブ教会／宮本房江／宗像千代子／森毅／諸岡千佐子／八木克道／矢後正子／安田香恵／山内昌彦／山田益男／横浜聖クリストファー教会／渡辺信子

物品寄付者（'22年12月13日～'23年12月11日）敬称略

㈱アリミノ　田尾兵二／安心プランニング　中村洋／クラブマンファクトリー　高橋秀

会費納入者（'22年12月13日～'23年12月11日）敬称略

相沢牧人／赤井充也／秋本光一郎／秋山献之／朝野恵美子／朝比奈誼・時子／穴井悦子／雨宮寿子／飯田孝太郎／池淵透・真理子／石原博之・幸子／一柳典利・百／伊藤幸史／伊東日出子／伊藤浩子／井上るみ子／今関公雄／入江努／岩間光雄／上田敏明／上村誠／鵜川久・貴子／内田孝・由美／大房健樹／岡田タイ／小川卓／小野裕／笠井正志／笠原雅子／片岡義博／片桐多恵子／葛城豪／加納美津子／カライ／唐木田麻起子／河合昇／河合由美子／河田健二／川満すわ子／木島出／岸元忠義／岸本望／北澤茂良・良／鬼本博文・なぎさ／金城真生／金城由美子／久世治靖・知子／倉辻明男／栗山盛雄／栗山洋子／黒田則子／小池直子／小泉恵子／小島正則／小松純一／小柳證／斉藤寛明／酒井厚子／坂本澄夫・純子／笹岡淳也・由紀子／佐々木国夫／佐藤耕一／佐藤純／佐藤哲典／佐藤芳子／座間幹生／沢野弥生／下地道子／下畑幹／柴原薫／渋沢一郎／渋谷真理／島文子／清水幸平／志村弘子／城下彰／神保和子／杉木峯夫／杉村進／杉本良平・和子／鈴木暁／鈴木竹次・保子／鈴木ちえ／鈴木信子／鈴木康仁／砂川博秋／聖母訪問会／仙敷正俊／園部千恵子／高橋保／高濱友理江／竹中浩／竹林徑一／舘野裕之／田中篤／田中孝子／棚原恵正／谷利子／俵里英子／丹安紀子／陳品岡／寺谷恵美子／富永敦子／友野博樹・和子／豊永泰子／永井深雪／長坂尚・明美／中台信子／中谷洋明・萌／中野良春・えり子／中村洋・久美子／中山美世子／長谷幸雄／七瀬谷重男／新倉俊吾・久乃／濁川孝志／西垣正子／西口晃／西口喜久枝／西村正和／根本利子／野崎久子／野田修助・和子／萩谷長生／羽柴加寿代／長谷川秀司／畑井正春／播磨裕治／福田桂・亜矢子／藤井誠・ひろ子／古市進／古川秀昭／古川昭子／星野一朗／星野直子／前田晃伸／前田容子／前田晃／前田広世／前田眞智子／松居勲／水谷勝／三原一男・京子／宮城正男・正子／宮崎秀貴／宮嶋眞／宮脇加代子／武藤六治／宗像千代子／衆樹歩実／八木克道／矢後正子／山内寿美子／山内昌彦／山崎美貴子／山田益男／湯田啓一／吉野康／若園紘志／渡辺洋一

新規会員（'22年12月13日～'23年12月11日）敬称略

葛城豪／カライ／小島正則／濁川孝志／山内昌彦

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。